

## 大阪保健医療大学大学院保健医療学研究科脳神経疾患身体障害支援学領域自己点検評価

大学院運営会議 BP 分科会では、脳神経疾患身体障害支援学領域（BP プログラム）の自己点検評価を毎年実施している。

構成員：藪中良彦（教授）、石倉隆（教授）、岩田篤（講師）、山口真人（外部委員）、三石理知（外部委員）

### 平成 29 年度 BP プログラム自己点検評価

《BP プログラム自己点検評価》

BP プログラムとして初の 2 名の新入生を迎えた。2 名とも問題なく概論の講義に合格し、12 月までに研究計画書審査も終了し、1 名は課題研究、1 名は既存データを使用した修士論文の作成を開始した。課題研究実施施設とは密接な連携が実施できた。2 名の学生は、問題なく特論も合格した。大学院授業評価アンケートにおいて、「大学院の教育に非常に満足している。」という学生から良好な評価が得られた。

研究計画書審査会に出席して頂いた 2 名の外部委員の先生方からは、研究計画に対して企業からの視点でアドバイスを頂くことができた。また、現状の教育課程および内容で問題がないことが確認された。

《修了者の状況に関わる効果検証を基にした自己点検・評価》

平成 29 年度課程より B P プログラムを開始したため、修了者なし。

### 平成 30 年度 BP プログラム自己点検評価

《BP プログラム自己点検評価》

BP プログラムとして 2 年生 2 名に加えて 2 名の新入生を迎えた。新入生は 2 名とも問題なく概論の講義に合格し、12 月までに研究計画書審査も終了し、2 名共に課題研究を開始した。課題研究実施施設とは密接な連携が実施でき、課題研究は順調に進んだ。また、問題なく特論も合格した。2 年生 2 名は、特論演習の病院演習において 1 年半大学院で学んだ知識と技能を基に高度な議論に参加することができた。また、優秀な課題研究と修士論文を作成し、学位を授与された。大学院授業評価アンケートにおいては、「大学院の教育に非常に満足している。」という学生から良好な評価が得られた。

研究計画書審査会と中間発表会に出席して頂いた 2 名の外部委員の先生方からは、研究計画および中間発表に対して企業からの視点でアドバイスを頂くことができた。また、現状の教育課程および内容で問題がないことが確認された。

《修了者の状況に関わる効果検証を基にした自己点検・評価》

平成 30 年度の修了生 2 名の施設監督者より「修了者の状況および教育課程等に係る効果検証」報告書が提出された。修了者の変化点としては、「職場での発言がより論理的になった。発言を客観的証拠を踏まえてわかりやすく説明できるようになった。」「多様でより深

い修士課程での学びを通じ、一つの考え方にとらわれず、広い視野を持った思考・実践ができるようになった。」が挙げられた。課程で修得した知識・技能の還元状況については、「臨床現場での問題解決能力が向上した。」「修得した知識や論理的思考力・分析力を、臨床で培った経験と照合し、学生への指導・教育時に還元している。」という状況が報告された。ディプロマポリシー達成状況は、達成できたという評価であった。授業計画への意見は、「学外演習での症例検討など、臨床・臨地実践との結びつきを重視した授業も研究を進めるうえでの学びにつながっており、より実践的で専門的な研究指導が行われていると思われる。」であった。教育課程編成への意見は、「働きながらも学べるといった点では、一部の有給休暇使用等はあるものの、常勤勤務の社会人が修学可能な夜間開講中心のカリキュラム編成は良いと思われる。」であった。脳神経疾患身体障害支援学領域への要望は、「専門職のさらなる実践力・専門力の養成が図られた課程になっていると考える。生活機能の支援という点では、急性期から生活期、さらには終末期まで、各病期における専門力の発揮を養う幅広い学びが得られると、さらに良いかと思われる。」であった。大学院への要望は、「研究に対する知識のみではなく、学生が自ら、臨床に即した課題を見つけ探求するマインドを育成してほしい。」であった。このように、修了者の変化点が高く評価されると共に、授業や教育課程についても高い評価であった。脳神経疾患身体障害支援学領域への要望では、各病期におけるより幅広い学びへの要望があり、今後検討していくことになった。

修了者 2 名から提出された症例報告は、最新の科学的根拠を基にした取り組みが紹介されており、2 年間の修士課程での学びが確実に修了生の身につけていることを確認した。

今回初めての修了生とその所属施設監督者からの高い評価を受け、これまでの BP プログラムの企画、運営、実施が適切に行えていることを確信できた。今後より一層有効なプログラムになるように、学生、施設監督者、企業からの意見を基に、プログラムの変更を行っていく必要がある。

## 令和元年度 BP プログラム自己点検評価

### 《BP プログラム自己点検評価》

BP プログラムとして 2 年生 2 名に加えて 1 名の新生を迎えた。新生 1 名は、問題なく概論の講義に合格し、12 月までに研究計画書審査も終了し、課題研究を開始した。課題研究実施施設とは密接な連携が実施でき、課題研究は順調に進んだ。また、問題なく特論も合格した。2 年生 2 名は、特論演習の病院演習において 1 年半大学院で学んだ知識と技能を基に高度な議論に参加することができた。また、優秀な課題研究と修士論文を作成し、学位を授与された。大学院授業評価アンケートにおいては、「大学院の教育に非常に満足している。」という学生から良好な評価が得られた。

研究計画書審査会と中間発表会に出席して頂いた 2 名の外部委員の先生方からは、研究計画および中間発表に対して企業からの視点でアドバイスを頂くことができた。また、現状の教育課程および内容で問題がないことが確認された。

《修了者の状況に関わる効果検証を基にした自己点検・評価》

令和元年度の修了生 2 名の施設監督者より「修了者の状況および教育課程等に係る効果検証」報告書が提出された。修了者の変化点としては、「担当患者の全身状態を画像や血液検査、理学療法評価など総合的な面からアセスメントを行い、治療介入を他の職員の見本として実施している。また、理学療法士としての視点で高次脳機能障害を捉え治療方法を提案できるなど診療領域が広がっている。」「自身が行っているリハビリテーションの目的を説明し利用者と目標を共有することを積極的に行っている。また、多職種からの情報収集および周囲と協働し動くことができる。」が挙げられた。課程で修得した知識・技能の還元状況については、「元々、療法士間での意見交換や勉強会主催するなど、積極的に知識を還元できる能力を持っていた。今後も当院臨床(教育)研究センターの中心として職員教育に携わってもらおうと考えている。」「修士課程で得た知見を多職種に周知させている。」という状況が報告された。ディプロマポリシー達成状況は、達成できたという評価であった。授業計画への意見は、「申し分ないと感じています。」であった。教育課程編成への意見は、「模擬的な症例だけではなく、臨床場面を通して講義やディスカッションがあり、より実践的な教育環境を作ることができていると感じました。」であった。脳神経疾患身体障害支援学領域への要望は、「臨床では画像上の予測と症状が異なる場合がある。しっかりと画像診断や予後予測ができる療法士育成に期待しております。臨床場面を通したディスカッションはとても療法士にとって意味があると思います。今後もよろしくお願い致します。」「訪問リハビリでも、脳画像を基にリハビリテーションを実施することの重要性を知った。」であった。大学院への要望は、「夜間講義をして下さっていたので日中の業務も滞りなく行っていました。」「新型コロナウイルス感染に伴い、これまでと異なった教育環境を整える必要があると思いますが、一人でも多くの療法士を育成頂きたいと思います。」であった。このように、修了者の変化点が高く評価されると共に、授業や教育課程についても高い評価であった。

修了者 2 名から提出された症例報告は、最新の科学的根拠を基にした取り組みが紹介されており、2 年間の修士課程での学びが確実に修了生の身につけていることを確認した。

修了生とその所属施設監督者からの高い評価を受け、これまでの BP プログラムの企画、運営、実施が適切に行えていることを今年度も確信できた。今後より一層有効なプログラムになるように、学生、施設監督者、企業からの意見を基に、プログラムの変更を行っていく必要がある。